

# 学問の自由と思想統制の歴史

荻野 富士夫

共産主義運動の取り締まりが頂点に達し、138人の教員が「赤化教員」として検挙された長野県教員赤化事件や小林多喜二虐殺などに象徴される1933年は、滝川事件が引き起こされたことにより、学問・研究の自由とかわる思想統制においても大きな画期となった。

共産主義弾圧に  
とどまらぬ排撃

講演や講義の内容により京都帝大教授の滝川幸辰の刑法学説はマルクス主義につながると、あるいは許容するとみなされた。思想学説を理由とする帝国大学教授の処分には、当時であっても高いハードルがあったが、政府は文官高等分限委員会に諮問した。異例のことであり、2時間をかけて審議をしたうえで全員一致

## 行きついた先は一学生の冤罪逮捕

おぎの・ふじお 1953  
年生まれ。小樽商科大学  
名誉教授。『戦前文部省  
の治安機能「思想統  
制」から「教学錬成」へ』  
『特高警察』『日本憲兵  
史』ほか

美濃部達吉の天皇機関説事件である。滝川事件の場合には、自由主義思想をマルクス主義の温床とみなしつつも、まだ正面からそれをやり玉にあげることまではできず、「赤化」思想と強引に言いこめるための弾圧であったが、この機関説事件では「根本思想において民主主義的傾向を有し、国体の本義を尊重せざる」ことが攻撃された。

河合は、1930年代前半には文部省の学生思想問題調査委員会の委員としてマルクス主義と対峙する第一人者であったが、著書が発売禁止になって出版法違反が問われるとともに、その個人主義・自由主義の思想傾向が問題視された。文官高等分限委員会の審議は35分ほどで終わり、国家思想を否認し、国体観念に背反するとして休職処分が付された。

こうした思想統制の強化の末に、1940年9月の教育審議会の答申「高等教育に関する件」では、大学の目的達成のために「国体の本義を体して真摯なる学風を振作し、學術を通して皇運を無窮に扶翼し奉るの信念を鞏固ならしむること」があげられた。これを受けて、12月、文部省は「大学教授は国体の本義に則り、教学一体の精神に徹するよう訓令した。

で休職処分付し、滝川は京大を追われた。  
委員の一人である和仁貞吉大審院長（現在の最高裁長官）は、「たとえ研究の独立と云うても、我国家と相容れざるに於ては許容出来ぬ、それは所謂研究自由の中に入らぬ」と発言した。

つつく思想統制の段階を引き上げたのは、1935年の「学」や「日本学」の講座が設置されていた。

「学者も剣とれ」  
軍事研究を推進

1943年になると、文部省の大学・高校の学術面の評価は、「真の皇国世界観に立脚せる真摯なるものを見るに至る」と満足すべきものとなった。



レーン夫妻



北大構内のクラーク像と並んだ宮沢弘幸（写真弘幸は「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」提供）

その高い評価の内実は、とくに理系の場合に顕著だった。工学・医学系の北海道帝国大学を例にとれば、1939年ごろから軍事研究と研究体制の軍事的再編が急がれた。

学問  
文化